司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 杉山友実子姉

開 会 招 詞 ヨハネによる福音書10章14-15節

- * 賛 美 歌 91:1 (ソングシート)
- 1. 主をほめうたえ、その聖所にて、主を賛美せよ。主の砦なる 大空でほめよ。強き力の 御業のゆえに主の御名をほめよ。
- * 開 会 祈 祷

罪 の 告 白 祈祷書2 罪の告白①

十 戒 祈祷書4

- 1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- 2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- 3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに望えてはならない。主は、 み名をみだりに望える者を、罰しないではおかない。
- 4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- 5. あなたの父と母を敬え。
- 6. あなたは殺してはならない。
- 7. あなたは姦淫してはならない。
- 8. あなたは盗んではならない。
- 9. あなたは隣人について偽証してはならない。
- 10.あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人 のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)
- 2. 角笛、吹きて、竪琴、かなで、主を賛美せよ。太鼓にあわせ、神を賛美せよ。 猫り舞いつつ、笛と弦もて 神を賛美せよ。

公同の祈祷 44 進路・受験・就職のための祈り

神様、教会の子どもたち・青年たちが、与えられた賜物と使命にふさわしく導かれますよう

なとりひとり あた のうりょく じゅうぶん はっき

に。一人一人が、与えられた能力を十分に発揮することができますように。すでに進路が

献 金 (黒)教会活動(赤)中会会議 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖 書 朗 読 詩編118編19-29節(旧約聖書958頁) マタイ21章1-11節(新約聖書39頁)

説 教・祈 祷 「柔和な王」杉山昌樹牧師

- * 賛 美 歌 86:1, 3
- 3. 喜びの声の中、角笛の音と共に、主は昇り行きたもう。 われらの主ほめまつれ。げに神は全地の主。歌もて、告げ知らせん。
- * 主 の 祈 り 祈祷書1

 天にまします我らの父よ願わくは御名をあがめさせたまえ 御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ 我らの日用の糧を 今日も与えたまえ 我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ 我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ した たがら こころ おけい こころ おけい こころ まから こころ おけい ローメン。

みめぐみあふるる 父、み子、みたまの ひとりのみ神に みさかえつきざれ。アー メン

* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 司会雨宮信長老・受付古澤純一長老(次週:古澤兵庫・雨宮信長老)

本日 受付1階:古澤迪子・森永美保執事 2階:加藤良明執事 /ZOOMホスト・録音:門脇光生

次週 受付 1階:藤井牧子・大日南信也執事 2階:那珂信之執事 /ZOOMホスト・録音:大 日南悠

マタイ21章1-11節 「柔和な王」

エルサレムへ

今日の所は一行がエルサレムに近付いて、という言葉で始まります。いよいよ、地上における最後の日々へとイエス様が進んでいく、その始まりの個所です。そのようないわば福音書全体のクライマックスの始まりにおいて、イエス様は弟子たちを少し先にある村に派遣することをしています。子ロバを連れてくるようにと命じているのです。それは預言者の言葉が実現するためだった、と4節に書いてあります。その言葉とは直後に書かれておりますゼカリヤ書9章からの引用の言葉です。このような言葉を読みますとこのところは、イエス様の不思議な預言、すなわち、少し先の村に行くと子ロバがつないであって、それを連れてくることができる、という言葉がまず語られて、その通りに言葉の実現があって、その後でイエス様が子ロバに乗ってエルサレムに入場して、というように二つの出来事が描かれているように見えなくもありません。

一つの目的

しかし、わたしはこの所は一つの目的に向かって描かれていると思っています。それは、一言で言いますと、イエス様が、柔和な王として、エルサレムに入場されているということがその中心で、前半のロバを連れてくる、ということもまた、そのためになされていて、そして、実際にイエス様が王らしく入場される、例えば、服を道に敷く、ということでしたら、列王記9章でエヒウが反乱を起こして王となったときに、人々が階段に服を敷いた(9:13)という出来事がありましたし、前後を行く人たちが、喜びの叫びをあげる中、動物の背に乗った王が進んでいく、ということでしたら、同じく列王記下1章のソロモン王の即位の様子がまさにそっくりなのですが、これらのこともまた、一つの目標を指しています。それは、このようにして、イエス様が王として行進しておられる、その先にある出来事を目指しているのです。それは、新しい王が神の都に迎え入れられるというイメージです。そして、実際に、そのようにイエス様が王としてエルサレムに迎え入れられる時に、エルサレムにおいてもまた、特別なことが起きている様子が語られています。ちなみに、今日の個所の10、11節はエルサレムの様子を描いているのですが、このようなことを書き残してくれているのはマタイだけです。ですからマタイは特にこれを強調したかったのだと思われるのです。それは、弟子たちにロバを探しに行かせるところから、このようにしてエルサレムに王として迎え入れられるまでが、一直線に続いていることを強調するためです。

揺れ動く一始まりのしるし

それで、順番が入れ替わりますが、得るサムでのでき語を語ります10節の一つの言葉に注目します。それは、「イエスがエルサレムに入られると、都中のものが、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ」。とあるところです。この「騒ぐ」と訳されました言葉は、元々の言葉をたどっていきますと、「揺れ動く」という意味があります。それは例えば、27章でイエス様が死なれた時に「神殿の幕が裂け、地震が起こり」(27:51)とあったり、ご復活の様子を描く28章イエス様の復活の時にもまた、「大きな地震が起こった」(28:2)というように訳されていますのと同じ言葉です。地が震えるのです。イエス様がエルサレムに入ってきたことによって、新しいことが始まるのです。そのような意味で、地上において、全く新しいことが始まっていく、そのしるしとして町全体が動揺している様子をあえてマタイは強調します。そしてまたこのところでは「一体、これはどういう人だ」ということが問われてもいるのです。この方を何と見るのかです。ここでは、「ガリラヤのナザレから出た預言者イエス」という言葉が示されています。それはあながち間違ってはいません。なぜなら預言者とは神様と一体的な存在であり、神さまが遣わされるものだからです。しかし、その上であえて言いますと、この問いは私たちに対する間でもあるはずです。いったいこの方は誰なのか、何をされるのか、それを私たちは見つけ出したいのです。

ロバに乗った王の到来

そしてそのような問いの答えはある意味では、5節の言葉、これは最初にお話しましたように、旧約 聖書ゼカリヤ書9章からの引用ですが、この言葉によってほぼ言い尽くされていると言えます。この所 では、シオンの娘への言葉として始まっていますが、これは、集合的にイスラエルの民、神の民を現わ しています。それは喜ばしいおとずれを語っています。王が、あなたの所に来る、という呼びかけで す。「お前の王がお前の所に」といういささかくどいような言い方は、あなたが心から喜ぶ、私の王、 ということのできる本物の王が、まさにあなたの所に来るのだ、もうその時が来ているのだ、という 意味です。しかし、その王は普通の王とは様子が違うのです。なぜなら、その王は、「柔和な方で、ロ バの子、子口バに乗って」と続きます。そもそも、ロバというのは、戦争向きではありません。馬より 足も遅く小柄で、見かけもパッとしません。そのようなロバに乗って、とことこと歩いてくる王という のは、おとぎ話に登場する、強く、さっそうとした王というイメージとはかけ離れています。しかし、 まさにイエス様はそのようなものとして、ロバの子にのって、悠然と歩んでいくのです。そして、人々 は、すでにお話しした通りですが、前後で歓声をあげながら、詩編からとられた「ホサナ」という言 葉を叫んでいるのです。ホサナという言葉は、もともとは、「救いたまえ」という意味だったようです が、この時代にはもう、日本語で言う「万歳」くらいの意味になっていたようです。ロバに乗った、武 器を全く持っていない、それほど立派な服も来ていない、若い男を前後に取り囲んだ一群が、何やら 歓声を上げて進んでいく、というのは異様な光景だったのかもしれません。しかし、それがイエス様 のそもそものあり方を示しているのです。

柔和と哀れさー手向かわない

そのようなイエス様らしさ、それを一言でいうのなら、やはり、柔和ということになります。イエス様ご自身が、私は柔和で謙遜(11:29)、と言われました。しかし、この柔和という言葉は、意味をたどっていきますと「貧しい、哀れな」とも訳せるようなのです。徹底して、立派ではないのです。むしろ、無力なのです。力強く周りを蹴散らす、というよりは、むしろ、蹴散らされてしまう方です。そのような意味で、「哀れ」なのです。そして、実際にイエス様は、山上の教えにおいてとても有名な言葉を語っておられました。これは開いて読んでみましょう。5章38,39節です。「「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」。これは、弟子たちや群衆に教えた言葉ですけれども、イエス様は、まさにこの言葉の通りに歩むのです。26章を見ますと、ご自身を逮捕しに来た人たちに抵抗していません。むしろ、抵抗しようとした弟子たちに向かって、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。(26:52)と言われています。イエス様はまさにご自身が教えた通りに、抵抗することなく、全く弱いものとして、捕らえられてしまいます。そして、弟子たちは、イエス様を見捨てて逃げて行ってしまいます。その限りにおいて、イエス様は、本当に哀れな王です。さらに言うのなら、イエス様は、ユダヤ人の王という看板を付けられて十字架にかけられています。笑いものになるユダヤ人の王、これ以上哀れな王はありません。

真の王

しかし、この点にこそ、イエス様の新しさが、そして誰にもまねのできない独特のあり方が現れています。なぜなら、この世の王は、力に頼ります。さっそうと馬に乗って乗り付け、剣の力で、敵を打ち伏せていく姿はさっそうとしてるかもしれません。しかし、それは、否定的に言えば、この世の王は、恐怖によって治めているともいえるのです。そして、今に至るまで、このようにして力をもって人に言うことを聞かせる以外の方法を見つけ出している支配者はいません。そして、最もイエス様が新しいこと、それは、この世の王は、自分が助かるために、部下を犠牲にするのに対して、イエス様は、人を助けるために、自分を犠牲にしておられるという点です。イエス様はご自身を投げ出すことによって、人を生かす王です。このようにして、イエス様が全く柔和であるのは、哀れな人の姿を取るのは、イエス様に力がないからではありません。そうではなく、この世の王とは全く逆のあり方で、本物の王になるためです。そしてこの新しい王のあり方のその中心にあるのは逆らわないことです。逆らわないのですけれども、自分を曲げるのではありません。徹底してご自分の役割に徹しているのです。

死にて死に勝つ

イエス様の役割、それは、徹底して罪人としての最期を遂げることです。イエス様は十字架につけられたときに、詩編の言葉を叫ばれました。「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」(27:45)。私たちに代わって、罪人の受ける罰である見捨てられる体験、徹底して神様に見捨てられる体験を選び取られたのです。そしてこのようなご自身の死によって、私たちに与えられた死の呪い、罪の結果として今も私たち一人一人に働いている死の力を打ち破られたのです。

柔和な王

このようにして、イエス様は完全な柔和さ、その貧しさと哀れさによって、私たちを救い出す、新しい、そして、唯一の王、真の王、柔和な王となられました。私たちは、この王であるイエス様のもとに身を寄せることができます。そして、罪の支配から自由にされて、新しいイエス様が勝ちとられた命に生きることができます。今このところから、柔和な王をほめたたえる喜ばしい歩みを始められます。

祈り

父なる神さま、あなたは罪のない完全な人である主イエスを地に遣わして下さり、私たちの身代わりとして十字架につけて下さり、その血潮によって贖いの業をなしてくださいましたから感謝いたします。私たちはこのイエス様の勝利によって、あなたの前で義とされ子とされることができます。今こそこの恵みの業に与っていることを覚えて、新しい命に生きることができますように。私たちの思いをいよいよあなたに向けさせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。